

# スポーツと女性 その②

- (1) スポーツと女性-服装の視点から-
- (2) 人見絹枝の生涯
- (3) 人見絹枝は何と闘ったのか

# 人見絹枝の生い立ち

1907年(明治40)1月1日、岡山県御津郡福浜村に農家の次女として生まれる。

1913年(大正2) 岡山県御津郡福浜尋常小学校に入学。(人見絹枝の銅像がある)

1920年(大正9) 岡山県立岡山高等女学校(現操山高)に入学。テニスを行う。

1924年(大正13) 二階堂体操塾(現日本女子体育大学)に入学。陸上選手としての素質が開花。短距離から投擲まで万能で、世界記録を何度も塗り替える。

1926年(大正15) 大阪毎日新聞社に入社

第2回女子オリンピック(スウェーデン・イエテボリ)で個人総合優勝。

女子陸上競技が初めて採用

1928年(昭和3) 第9回アムステルダム五輪800mで銀メダルに輝く。

1929年(昭和4) 朝鮮・日・独対抗大会(ソウル)、100m、走幅跳で世界記録

1930年(昭和5) 第3回女子オリンピック(チェコ・プラハ)で個人総合2位

# クーベルタンの女性蔑視

近代オリンピックの創始者であるクーベルタンは

「オリンピックにおいて重要なのは、勝利することではなく参加することである。まさに人生においてそうであるように、闘いに勝ったかどうかではなく、よく闘ったかが大切なのである。」

という名言を残しています。

その一方で次のような女性蔑視発言も見られます。

「女性をオリンピックに参加させることは、**実際的でなく、面白くなく、不快で、間違っている。**女性の誇りは、産む子供の数とクオリティーを通してはっきりと表に現れる。そしてスポーツについて言えば、女性の素晴らしい偉業は、**自分の記録を出すことではなく、息子たちを勝利に向けて励ますことだ**」

「体力の劣る女性の参加はオリンピックの品位を下げることにつながる。」

「女性の主たる役割は、勝者に冠を授けることであって、**女性が汗を流し、肉体的に争うのははしたない**」

第1回アテネ大会 男性のみ参加

クーベルタンが**古代オリンピックを理想**としたため

オリンピックの創始者  
クーベルタン



# 近代オリンピックにおける女性の参加

第1回	1896	アテネ	女性参加者なし
第2回	1900	パリ	テニス、ゴルフ（女性22人／997人中 2.2%） *万博の付属イベント
第3回	1904	セントルイス	アーチェリー
第4回	1908	ロンドン	アーチェリー、フィギュアスケート、テニス
第5回	1912	ストックホルム	ダイビング、水泳、テニス ※日本の初の参加
第6回	1916	ベルリン	（第一次世界大戦のため中止）
第7回	1920	アントワープ	ダイビング、フィギュアスケート、水泳、テニス
第8回	1924	パリ	
第9回	1928	アムステルダム	陸上競技は女子初。 5種目（100m走、800m走、4×100mリレー、走高跳、円盤投） 人見絹枝が800mで銀

大会を運営する**男性の視点**で、「女性らしいスポーツ」とみなした競技が、女性のオリンピック種目として認められていた。

# 女子陸上競技の発展

女子陸上競技は、19世紀末の欧米で主に高等教育の中で体育が重視され、**体操の一環**として発達した。

第一次世界大戦の間、戦場にいる男性とともに、優れた体力・体格を備えた女性の必要性が認識される。

女子体育の重要性を知ってはいても、順位を競う陸上競技が過熱すればかえって女性らしい体型を損なうため、**体操を重視すべき**と主張する人が教育関係者に多かった。

1917年、熱心な婦人参政論者だった**アリス・ミリア（ミリア夫人）**が3つのスポーツクラブを組織して、**フランス女子スポーツ連盟（FFSF）**を結成した。

1921年にはイギリス・スペイン・チェコスロバキア・イタリア・アメリカの代表とともに**国際女子スポーツ連盟（FSFI）**を創設。

# アリス・ミリア(ミリア夫人) 1884-1957

- ・ 1917年、フランス女子スポーツ連盟（略称：FFSF）を設立する。
- ・ 1919年、国際オリンピック委員会（IOC）に対し、1924年パリ・オリンピックへの女子陸上競技の参加を強く求めるが拒否される。  
↓
- ・ 1921年にはイギリス・スペイン・チェコスロバキア・イタリア・アメリカの代表とともに国際女子スポーツ連盟（FSFI）を創設。初代会長に選ばれた。
- ・ 1922年、第1回国際女子オリンピック（フランス・パリ）を開催5カ国から77選手が陸上競技に参加、約2万人の観客を集めた。
- ・ その後国際陸上競技連盟（IAAF）・IOCとの折衝、国際女子競技大会の開催などの運動が実を結び、1928年、アムステルダムオリンピックで5種目ながら女子陸上競技が採用された。
- ・ 競技種目の拡大には強く抵抗され、1936年、IAAFによって女子陸上競技の管理運営が統括されると、FSFIは実質的に消滅。



ミリア夫人と人見絹枝

# 国際女子スポーツ連盟 (FSFI)

国際女子スポーツ連盟(Federation Sportive Feminine Internationale(FSFI))は、1921年に創設され、1936年に消滅した女子陸上競技の国際的な統括団体。会長はフランスの**アリス・ミリア**夫人。1920年代後半には日本を含め世界37カ国が加盟した。

1936年の第13次国際陸上競技連盟 (IAAF)総会においてIAAFがFSFIに代わって女子陸上競技を完全に管理することが決定され、FSFIが主催する第5回国際女子競技大会の開催について承認が否決されたため、実質的に消滅した。



オリンピック				女子スポーツ
回	開催年	開催都市	女性種目	
1	1896	アテネ	女性参加者なし	
2	1900	パリ	テニス、ゴルフ(22/997)	
3	1904	セントルイス	アーチェリー	
4	1908	ロンドン	アーチェリー、フィギュアスケート、テニス	
5	1912	ストックホルム	タビング、水泳、テニス	
6	1916	ベルリン	第一次世界大戦により開催中止	<p>1919アリス・ミリア フランス女子スポーツクラブ連盟 (FSFSF) 会長に就任</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・IOCに手紙を出し、IOCへの女性参加と1920年アントワープ大会での女子の参加競技種目の増加を訴えた。</li> <li>・ミリアは国際オリンピック委員会(IOC)および国際陸上競技連盟(IAAF)と、1924年パリオリンピックに女子の陸上競技を含めるよう協議を開始。⇒IOCはこれを<b>拒否</b></li> </ul>
7	1920	アントワープ	馬術とセーリングが加わる	<p>1921国際女子スポーツ連盟(FSFI)設立</p> <p>1922第1回国際女子オリンピック大会 (パリ)</p> <p>IOCは、FSFIが大会名称に「オリンピック」という言葉を使ったことを非難。協議の末、IOCとIAAFは、1928年アムステルダムオリンピックにおいて<b>陸上競技に女子が参加することを認め</b>、その代わりにミリアは<b>大会名称を「国際女子競技大会」(Women's World Games)</b>に変更した。</p>
8	1924	パリ		<p>1926第2回国際女子競技大会 (イエテボリ)</p> <p><b>人見絹枝一人での出場 個人総合1位</b></p>
9	1928	アムステルダム	陸上競技では <b>女子の5種目</b> (100m走、800m走、4×100mリレー、走高跳、円盤投) <b>人見絹枝800で銀</b>	<p>FSFIは<b>アムステルダムの5種目のみを満足の行くものとは認めず</b>、1930年にプラハで第3回大会、1934年にロンドンで第4回大会を開催する。</p> <p>1930第3回国際女子競技大会 (プラハ)</p> <p><b>個人総合 1位ワラセヴィッチ (ポーランド) 2位人見絹枝 5個のメダル</b></p>
10	1932	ロサンゼルス		<p>1934第4回国際女子競技大会 (ロンドン)</p> <p>第5回大会の代わりにヨーロッパ陸上競技選手権大会で女子の大会が実施されたため、第4回が最後の大会となった。</p>

# 人見絹枝の競技参加

—人見絹枝は誰と、何と(闘った、戦った)のか—

①1926年(大正15年)第2回万国(国際)女子オリンピック大会 スウェーデン・イエテポリ  
100ヤード2位 走幅跳1位 立幅跳1位 円盤投2位  
**個人総合1位**

②1928年(昭和3年) 第9回 オリンピック・アムステルダム大会 **800M2位(銀)**

③1929年(昭和4年)朝鮮・日・独対抗大会(ソウル)  
100M、走幅跳で驚異的な**世界新記録で1位**

④1930(昭和5年)第3回万国(国際)女子競技大会  
チェコ・プラハ  
60M3位 走幅跳1位 やり投3位 三種競技2位 400mリレー4位  
**個人総合2位**



イエテポリで行われた第2回国際女子競技大会の走り幅跳びで 5m50cmを跳び優勝

**①～③と④では、  
大きな違いがあった。**

## 1928年 アムステルダム大会後の人見絹枝

800mで銀をとったものの、「100mで勝っていたならば」という思いがあり、惨敗した思いが勝り、憔悴しきっていた。

「これ以上、日本代表選手という重荷は背負いたくない」



- ・極度のスランプ。その間、1928年11回に渡る講演
- ・1929年になっても、憂鬱な日々を過ごす。

・その間に、ミリア夫人に手紙を書く。

⇒「・・・22, 3で歳をとったとは何事ですか？そんなことでくよくよするのはやめて、早く来年目指して、練習にとりかかりなさい。」  
愛情溢れる手紙→立ち直るきっかけをもらう。

※アムステルダム五輪の表彰式で、勝者に対して国歌が演奏され、国旗が掲揚された。その情景を目の当たりにしたことから、人見絹枝の発案で、高校野球勝利校の校歌演奏と校旗掲揚が1929年春の大会から始まるようになる。



1926年9月12日号  
(表紙は人見絹枝)

# 人見絹枝が考えたこと

- ①1926年(大正15年)  
第2回国際女子オリンピック大会  
スウェーデン・イエテポリ
- ②1928年(昭和3年)  
第9回 オリンピック・アムステルダム大会
- ③1929(昭和4年)朝鮮・日・独対抗大会(ソウル)



- ④**1930(昭和5年)第3回万国(国際)女子競技大会**  
**チェコスロバキア・プラハ**

その違いは、**5人の若い女子選手を率いての参加だった。**自分に続く後継者を育てたい、日本の女子スポーツの発展と振興を図りたい、と願う人見絹枝の切なる思いが込められていた。



そのために絹枝はどういう行動を起こしたのだろうか？

# 第3回万国(国際)女子競技大会に向けて 人見絹枝の行ったこと

## ①選手集めや渡航費用集めで奔走

- ・選手集めと親の説得
- ・スポンサーはいない。後輩も連れて行く。

＊渡辺（梅村）すみ子さんら

（海外遠征費用は一人3000円。チーム4名、監督1名、計5名で15000円が必要

当時の35歳サラリーマンの平均月収が70円)

- ・渡航費用調達のため ※政府の補助なし

＊一口10銭の応援袋の作成。寄付を募る。

全国の女学校800校、一校500人として  
40万個配布

⇒出発3日前に15000円（目標額）プラス500円が集まる。

※二階堂トクヨは1000円を寄付。



日本女子選手団(左から 中西、濱崎、井尻  
村岡、人見、本城、木下、)

# 第3回万国(国際)女子競技大会に向けて 人見絹枝の行ったこと

## ②講演・講習会

カンパとスポーツ振興のために全国行脚

\* 新幹線も飛行機もない時代。

1926年 (19歳) —20回

1927年 (20歳) —23回

1928年 (21歳) —53回

1929年 (22歳) —3回

1930年 (23歳) —8回



## 第3回万国(国際)女子競技大会に向けて 人見絹枝の行ったこと

### ③執筆活動—単行本5冊

『最新女子陸上競技法』

文展堂書店 1926年 19歳

『スパイクの跡』

平凡社 1929年 22歳

『戦うまで』

三省堂 1929年

『ゴールに入る』

一成社 1931年 25歳

『女子スポーツを語る』

人文書房 1931年

その他、雑誌等への寄稿多数



人見絹枝の著書

# 1930年(昭和5年)第3回国際女子競技大会(プラハ)

- 1930年9月6日～8日  
チェコスロバキアのプラハで開催  
参加18カ国、300余人の参加
- 1930年7月25日、5人の選手と共に日本を出発  
本城はつ(19)、中西みち(18)  
村岡美枝(18)、渡辺すみ子(15)  
浜崎千代(20)、人見絹枝(24)
- 8月11日、プラハ到着。  
プラハ市民の大歓迎を受ける。



プラハ・ウィルソン駅に到着した日本選手団

# 1930年(昭和5年)第3回国際女子競技大会(プラハ)

## <成績>

60m3位 100m準決勝敗退 200m棄権  
走幅跳1位 槍投3位 三種競技(100m、  
走高跳、槍投)2位 400mリレー4位、  
日本は総合4位(ポイントのほとんどは  
人見絹枝によるもの)、**個人総合2位**  
(ポーランドのワラセビッチが優勝)

・初めて国外陸上競技の事情を知り、自分のトレーニングに生かすだけではなく専属コーチや年間を通じてのトレーニングの重要性などを著書を通じて広く後進に伝える。



日本女子選手団

# 1930年(昭和5年)第3回国際女子競技大会(プラハ)

走り幅跳びで優勝 (5m90cm)

・・・絹枝は、優勝マストの前に誇らしく起立した。チェコ語のアナウンスに続き、「君が代」が場内に高らかに吹奏された。

「ヒトミ!ヒトミ!」

スタンドから観衆のあげる歓声も聞こえてくる。絹枝は涙をこらえきれず、泣きながら優勝の喜びに浸った。本当に良かった。ガンがコノスパスカが熱いキスと強い握手で祝ってくれる。5人の後輩たちも涙で顔をくしゃくしゃにして喜んでいる。

走幅跳で優勝マストの前に立つ人見絹枝、中央はガン選手、左はコノスパスカ選手



# プラハ市民の見方

チェコスロバキアに1ヶ月滞在した選手団は、**親日的なチェコスロバキア国民と好意的なプラハ市民**に囲まれた生活した。

## チェコスロバキア新聞記事から

「・・・女子スポーツ分野で、最近まで知られていなかった日本は、今年の競技会で数多くの種目で活躍しようとしている。間違いなく自国のスポーツの普及に力を尽くした人見絹枝の功績は大きい。今までの競技会で残した記録、その記録を出すために限りない努力に対して日本国民の感謝の気持ちはいかばかりか。」

「彼女は全力をつくした。だが、疲れきっていた。いよいよプラハを旅立つとき、第2回国際女子競技大会以来親しくしていた外国人選手たち、そしてチェコの人々が別れを告げに来た。」

「この大会での人見の活躍は、総合優勝した4年前ほどではなかった。しかし、動けなくなるまで必死にやりとげる彼女の姿は、チェコの人々に大きな感動を与えたのだ。」

# 欧州各地で親善試合

1931年

- ・ポーランド 9/11
- ・ドイツ 9/13
- ・ベルギー 9/20
- ・フランス 9/21

11日間で4カ国で試合  
⇒体調をこわす

## 帰国の途につく

ロンドンから出港、  
マルセイユでの故国からの手紙



第3回国際女子競技大会を終えて帰国した人見絹枝(右から2人目)と(左から)中西みちさん、渡辺すみ子さん、浜崎千代さん、村岡美枝さん、本城ハツさん＝1930年11月6日撮影

# 帰国の途に マルセーユで見た手紙 日本での反応

## ■帰国途上の船内への手紙

「…新聞で見るのが待てないで毎日新聞社の方に電話をかけて聞いてみるが、毎日毎日大した成績でもなく『三等2つ』とか『予選で落ちました』とか、ろくに社の人にも教えてくれません。出発のときあれだけ大きなことを言って出発したくせに、今度の成績はどうです？世間の人は今まであなたが一等をとるというのでいろいろ話してくれたのですが、今度という今度は取り合わないでしょう。帰るときは ①  を被っていらっしやい…」

## ■手紙も新聞も不満の声に満ちていた

「日本の選手がどこに遠征しても固くなって実力以上に働けないのは、あまり故郷の人々が勝負にとらわれすぎるからである。②  多き世の人よ！と私はいじらしい妹たちの姿を見るたびに、のろいたくさえなった」  
人見絹枝『ゴールに入る』

…①ベール ②…罪

# 同じようなことは、現在でも続く

① 「北京オリンピックへの見送りは2、3人、（銀メダルを取ったら）出迎えは200～300人」（フジテレビ「食わず嫌い」での発言）

フェンシングの太田雄貴選手

※太田 雄貴（1985年～）

2000年代から2010年代にかけて活躍した日本のフェンシング選手（フルール）

2006年 ドーハ世界選手権 個人金 2008年北京オリンピック個人銀

2012 ロンドン フルール団体銀 2015 モスクワ世界選手権 個人金

## ②非国民！？（2008.10.18中日スポーツ）

ー北京オリンピックでケガのため棄権した野口みずき選手に浴びせられた言葉。

・・・非難のメールや手紙が殺到し、「非国民」という声まで上がったみたいで。

後から事実を少しずつ知るわけですが、そうした多くの非難からも監督とコーチが盾になって私を守ってくれました。

※野口みずき（1978年～）

2002年マラソン初挑戦の名古屋国際女子マラソンで初優勝、2003年の世界陸上選手権で銀メダル、04年アテネ五輪では金メダルを獲得。

# 帰国後の活動

- ・ 1930年11月6日神戸港に到着  
帰国の翌日に、勤務先で大会報告
- ・ 派遣費募金のお礼
- ・ 講演活動 1930年～  
11月 東京日日新聞社主催講演会（1000人）日帰りで帰阪 吸入器持参  
京都で帰国歓迎会  
大阪、名古屋、京都、三重、東京、四国での講演

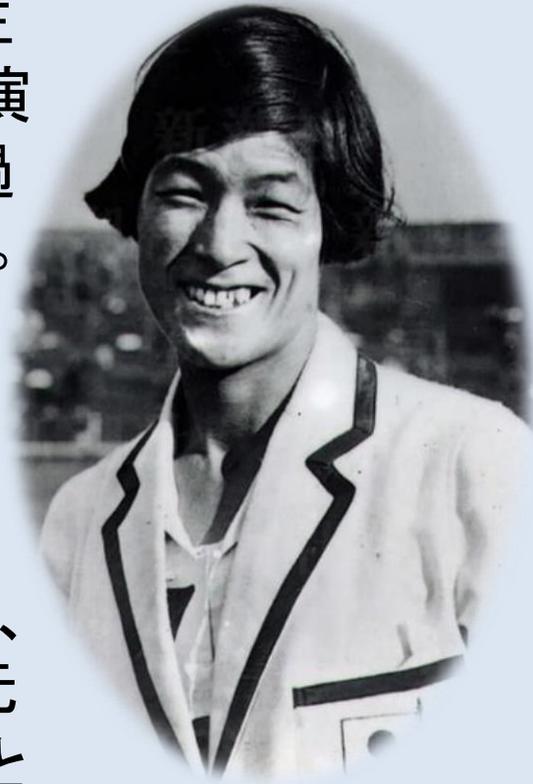
講演内容は、大会報告に加え、指導者の育成にも言及

「プラハ大会で得た14点の努力の記録は、将来輩出される女子選手への誘い水であるならば、私の満足は、これに過ぎる者はありません」（人見絹枝）

Q) 世の中の冷たい反応に対して、人見絹枝は、  
この後どのような人生を歩んだのでしょうか？

①帰国後、これまで通り選手生活・記者生活を送り、また、講演旅行で全国を回っていたが、過労が原因で亡くなってしまった。

③日本での競技生活をやめて、フランスに渡り、ミリア夫人の元で選手生活を始め、陸上選手として活躍した。



②スポーツ選手、スポーツ記者をきっぱりとやめてしまい、郷里の岡山に帰り、教師の道を歩んだ。

④帰国直後から次の大会に向けての練習を開始し、第10回オリンピック・ロサンゼルス大会(1932)に出場し活躍した。

# 帰国後の生活・病状の悪化

- ・ 運動部記者としての仕事と選手との両立  
社の仕事⇒トレーニング⇒社の仕事、家での原稿という多忙な日々。
- ・ 藤村蝶との生活（絹枝の生活を支えていた）  
⇒人見絹枝に対するゴシップ、2人をモデルにしらフィクションが婦人雑誌に連載。「人見は男性だ！」というデマ。
- ・ 1931年4月 体調を大きく崩し、肋膜炎で大阪医大病院に入院  
5月 快方に向かう  
6月 肺炎を併発  
  
7月29日 衰弱、呼吸困難に陥る。  
8月2日午前0時25分死亡 24歳  
(アムステルダム800m銀と同じ日)

【正解①】

# 世界的盛名を馳せた

## 人見絹枝嬢(本社)死す

### わが女子スポーツ界の第一人者

今春大阪大病院で専ら療養中  
二日病俄に草まる、齡僅に廿五

日本の生んだ世界的スポーツ・ウーマン、本社社員、人見絹枝嬢が死んだ、八月二日午後零時廿五分、恰も本社主催西日本サイタル・チーム・レースの決勝日、選手のリールンが追いつた時、備々たる本社発行機の留音機を機軸に、大阪帝大附屬病院本館三階小堀内科二〇號室で連綿家にはふさはしい幽霊を遊けた、枕頭には本社兼村總務、黒田木村、日本女子スポーツ協理理事野村氏らが立替つたが、あまりの急死だったので一日留音した郷里の親達はもちろん多くの親友、知己の眠つけるのさへ間に合はなかつた、病名は乾癆性肺炎、享年わづかに廿五

### 死の直前まで

### 意氣旺んに

#### 枕頭のノートに絶筆

#### 病はブラীগから歸つて

人見嬢は昨年十一月ブラীগの第... 同女子オリンピック大会から歸つて以来、急性肺炎に罹つてゐたのを推して各地の講習會やコナラの依頼に應じてゐた、それは後三回の外征に際し、多大の... 後援をされた

若い女性達の原動力に洩れるためであつた、その無事が遂に本年四月に入つて助産院となり、大阪帝大醫學部附屬に入院のやむなきに立至らしめた、入院後は同病の小出博士が責任で時に安眠を保つたため、重なる病状を脱し一般にあま... 知らさず、病室も本名も現さず



嬢枝絹見人るけ逝

にみたが、それでも、次から次へ傳はり血と涙で書いたやうな真心からの見舞の手紙、療法の難談、中には向會謝儀を言してさへ會ひたいといつて来た人もあつた、かくて五月末ころには大に快方に向つたが、最近再び病状が再進し四日前に別館から本館に移つたころには著しく衰弱が加は

大國醫長衛氏が取る  
町岡弔電續々  
人見嬢の遺體は美しく薄化粧して二日午後大阪大病院に安置されたが、訃報に接し山本社社長代理、日本スポーツ協理理事野村正一氏、在阪各新聞通信社等の町岡

いくら勝たうと思つても、負かしてやるぞ胸の虫共  
あかん、死ぬ、誰が殺ろすか、生きて見る  
など涙で書きし息をひきとるまで如何にもスポーツ女子らしい旺ん、氣味とフアイチング・スピリットをもつて強命的な死病と悲壯な取組合ひをやつてゐたのだつたが、その鋭意進まも今は嬢の絶筆となつてしまつた

### 最後の

呼吸困難を訴へ續けてゐた、後六時過ぎから直に近親者に打電し十数本の洋紙を打ち附けたが、遺體は極めて明瞭、死ぬ前日まで枕元のノートに

# 人見絹枝の死

- 1931年4月に肺炎を併発する。
- 8月2日午前0時25分死去 24歳

死の直前まで、枕元のノートには「高い熱上がらば上がれ 時が来れば、どうせ逃げ出す」 「いくら勝とうと思つても 負かしてやるぞ胸の虫ども」という鉛筆の走り書きがあつた。

24年と8ヵ月の短い生涯だった。

# ミリア夫人の弔文

「私は3日朝、**悲報に接し悲嘆にくれています**。人見嬢の死は全世界のスポーツ界から惜しまれている、まことに嬢の名声は世界的で、あの1926年、スウェーデンのイエテボリで第2回世界女子競技会が行われた時、忽然と姿を現した、すべての競技、殊に幅跳で偉勲をたてられ、深い印象を残し、瞬くうちに全世界のスポーツ界第1位に躍進された。……略……彼女は、ただ単にスポーツ界の人物であるばかりでなく、その死去と共に日本の熱烈なる**スポーツの伝道者を失った**。まことにまことにスポーツ・体育の道德価値に対する嬢の信念は燃ゆるがごときものであり、嬢は**自らの模範をもって、言葉をもってまた文章をもってその信念を広められた**。競技に優勝することは人見嬢においては、**自己のための満足のためにこれを追求したのではなく、**これをもって日本の同胞を説服する手段とし、かつ日本を外国に知らしめんとする手段に用いんとしたのである。日本の若き女性たちよ、人見嬢が御身らのために残した偉大なる教訓に開かれよ!スポーツと体育を練習され、同時に適度の範囲に止まるべきを知られよ!**私はここにあらゆる称賛と愛情を持って人見絹枝嬢の追憶に捧げます。**」

# プラハ市民の反応

①レースでの「ヒトミ！ヒトミ！」コール

②オルシャニ国立墓地に市民の募金で記念碑設立—現在も美しく保存されている。

## 人見絹枝

1931年8月2日 大阪で逝去

愛の心を持って世界を輝かせた女性に  
スポーツ人の感謝の念を捧ぐ

チェコスロバキアハンドボール連盟・女子スポーツ連盟

③チェコの年間最優秀女子選手には「人見絹枝杯」が贈られている

プラハ市民と当時の日本(人)の違い

オルシヤニ国立墓地にある  
人見絹枝を称えた記念碑



# 人見絹枝の生い立ち

1907年(明治40)1月1日、岡山県御津郡福浜村に農家の次女として生まれる。

1913年(大正2) 岡山県御津郡福浜尋常小学校に入学。(人見絹枝の銅像がある)

1920年(大正9) 岡山県立岡山高等女学校(現操山高)に入学。テニスを行う。

1924年(大正13) 二階堂体操塾(現日本女子体育大学)に入学。陸上選手としての素質が開花。短距離から投擲まで万能で、世界記録を何度も塗り替える。

1926年(大正15) 大阪毎日新聞社に入社

第2回女子オリンピック(スウェーデン・イエテボリ)で個人総合優勝。

女子陸上競技が初めて採用

1928年(昭和3) 第9回アムステルダム五輪800mで銀メダルに輝く。

1930年(昭和5) 第3回女子オリンピック(チェコ・プラハ)で個人総合2位

欧州各地で親善試合に出場。体調を大きく崩す。

1931年(昭和6) 8月2日 肺炎のために24歳の若さで亡くなる。

1932年(昭和7) 人見絹枝追悼競技会が開かれる。(岡山)

プラハ郊外のオルシャニ墓地に人見絹枝記念碑が建立される。